

プロセス指向の消費理論

馬 田 哲 次

I. はじめに

本稿は、拙稿馬田 [16] で展開された視点、つまり人が本来持っている能力を日常生活の中で現実のものとし、真に豊かに生き活きと生きるという視点から、消費を論じたものである。

経済学の目的は、アダム・スミスも「諸国民の富」の中で、

「政治家または立法者の科学の一部門と考えられる経済学 (political oecconomy) は、二つの別個の目的をたてているのであって、その第一は、人民に豊富な収入または生活資料を供給すること、つまりいっそう適切に言えば、人民が自分のためにこのような収入または生活資料を自分で調達しうるようにすることであり、第二は、国家すなわち共同社会 (state or commonwealth) に、公共の職務を遂行するのに十分な収入を供給することである。経済学は、人民と主権者との双方を富ますことを意図しているのである。」

と述べている通り、人々を豊かにすることにある。社会の生産力が低い段

階に於いては、生産量を増やすことが、豊かな社会を創るためには重要である。社会的に必要とされる財の絶対量が不足しているから、何よりも先ず生産量を増加させることが重要である。そのような時代に於いては経済分析の中心が生産に置かれていても何も問題はないであろう。

しかしながら、生産の究極の目的は、アダム・スミスも

「消費は、いっさいの生産の唯一の目標であり、目的なのであって、生産者の利益は、それが消費者の利益を促進するのに必要なかぎりにおいてのみ顧慮されるべきものである。この命題は完全に自明であって、わざわざ証明しようとするのもおかしいくらいである。」

と述べている通り²⁾、本来消費であるはずである。今日の社会では、生産力の水準が高まり、生産量が増えている。所得も増加し、多くのものを購入することが出来るようになった。我々の生活は物に溢れ出し、物を購入しても以前ほど豊かさを感じなくなってきた。購入しても使用しない物も多く、使いきれなかった物がゴミとなり、その処理が問題になっている。このような社会に於いては、よりよい生活、より豊かな生活といったことは、どの様な消費行動を送っているかによって決まる。

1) スミス・A., [諸国民の富 (三)], P5.

2) スミス・A., 「諸国民の富 (三)」, PP455-456.

1. 心の豊かさを重視する人が増加

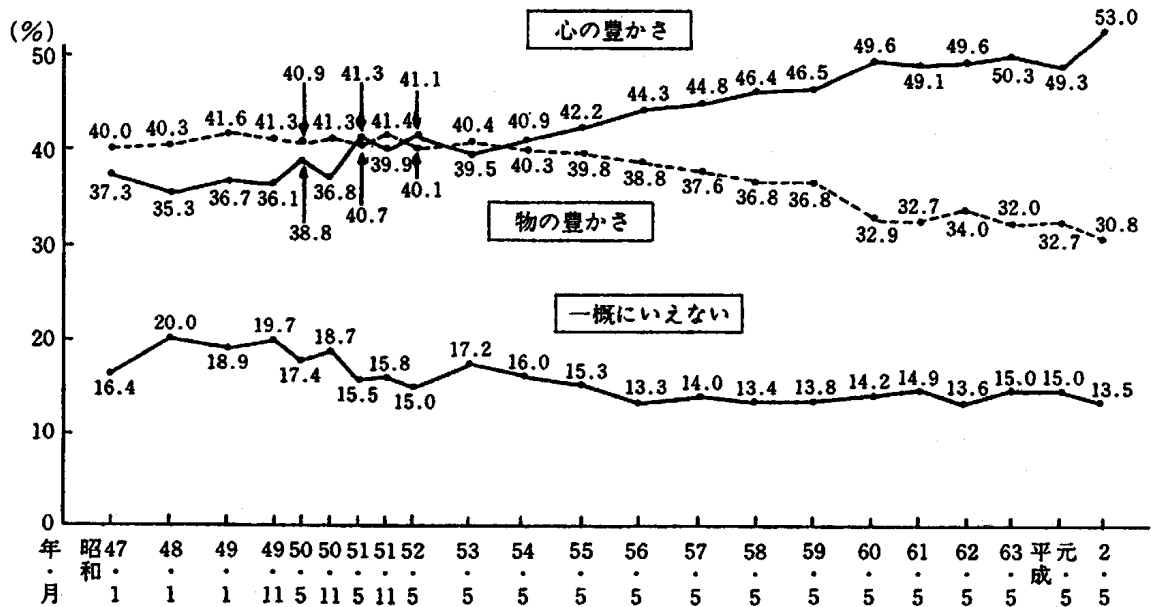


図1

また、図1のように、今日の日本に於いては、物の豊かさよりも、心の豊かさを重視する人が多くなってきている³⁾。単に物を生産するだけ、購入するだけでは豊かさを実感することは難しくなっている。購入した財をどの様に使用、消費するかということが豊かさを実感するうえで重要になっている。

さらに、今日の最も重要な経済問題の一つである環境問題の一端も消費行動にある。もちろん環境問題は、経済体制との関わりもあり個人的な努力だけで解決することには限界もある。しかし、意識的な努力によって、ゴミの少ない消費行動をすることもできる。逆に、意識的な努力がなければ解決は不可能であろう。法律で細かい罰則を規定してそれらを守らせるとなるとコストがかかりすぎる。

また、食べ物の選択によって、病気になることもあれば、病気が治ることもある⁴⁾。高齢化社会の様々な問題を解決するために、人が生き活きと、

3) 経済企画庁国民生活局、「国民生活を変える新たな主役たち」、P69

健康に生きていくような生活の在り方を追及することが、真の問題解決につながるのではないだろうか。そのためには、消費行動をもっと深く考察することが必要になってくると思われる。

II節では、新古典派の消費理論を批判的に検討する。III節では、現実の消費行動を考察する。ここでのポイントは次の通りである。第一に、人の消費行動は欲求が基礎になっており、その欲求は高度化する。第二に、低次の欲求については満足水準の設定とパターン化が消費行動の基礎になる。第三に、高次の欲求を満たすべく努力するが、今日の社会ではその欲求が完全に満たされることは極めて困難である。

IV節では、高次の欲求を満たす消費行動、つまり生き活きと生きる消費行動（これをプロセスを進める消費行動と呼ぶ）について考察する。その際、ラスキン・J., セン・A., の議論を参考に、プロセスを進める消費行動について説明する。財のもつ固有価値を十二分に活用し、自己の持つ潜在能力を現実化していく消費行動について論じている。

V節では、消費行動において、プロセスが進んでいるかどうかの判定基準を与える。そして最後のVI節で、日常生活に於いてプロセスを進めるために、消費に於いて留意すべき点についてまとめてみた。

II. 新古典派消費理論批判

新古典派の予算制約下の効用極大といった消費理論、並びに、その際仮定される合理的な経済人には次の様な問題がある。

第一は、富の定義である。ワルラスは、純粋経済学要論の中で、富を次のように定義している⁴⁾。

4) 例えば、カーパー・J., 「食べるクスリ」, 桜沢如一, 「食養人生読本」参照。前者は最新の栄養学に基づき、後者は、東洋的な陰陽のバランスによる栄養学に基づいている。

5) ワルラス・L., 「純粋経済学要論」, P21。

「物質的または非物質的なもの（ものが物質的であるか非物質的であるかはここでは問題ではない）であって稀少なもの、すなわち一方においてわれわれにとって効用があり、他方において限られた量しか獲得できないもののすべてを社会的富と呼ぶ。」

簡単に言えば、価格がついて市場で取り引きされるものが富ということになろう。そして、富の象徴が貨幣である。貨幣が富の象徴になることにより、盲目的に貨幣を得ようとする。貨幣さえ手に入ればそれで豊かになったと錯覚してしまう。或いは、貨幣さえ手に入れてしまえば何でも手にはいると錯覚してしまう。本当に必要なものが何なのか考えようともせず、ただ単に貨幣を得ることが目的化してしまう。それが人の心を荒廃させる。はなはだしい例が、性商品の低年齢化である。大切なものを見失い、安易に貨幣を手に入れようとする。乱れた生活の中で、今後の社会を担っていく子供たちが、いともかんたんに人生の裏街道を進んでいくのは重大な問題である。

また、現代社会では、物が余っている。家の中には何年も着ない服があったり、新製品が発売されると、まだ使える物が粗大ゴミとして捨てられていることも多い。時に、小遣いを十分にもらっている子供が、万引きで捕まったりする。つまり、価格がついて取り引きされるものを多く所有していたとしても、そのことから直ちに豊かさを実感できる訳ではない。 unnecessaryなものを所有することによって、かえって必要なものが何か分らず、逆に心は満たされなくなっている。このようなことから、富つまり我々の生活を豊かにするものが何であるか考え直す必要がある。

第二は、消費の意味である。新古典派の消費でいうところの消費は、予想である。つまり、消費財を購入し、消費するとしたら得られるであろう効用の予想にすぎない。実際に消費して得られる効用ではないのである。この何処に問題があるかという、例えば、ゴミ問題である。実際に購入

したパンを美味しく食べて、ちゃんと栄養になる場合もあれば、カビが生えたのを知らずに食べて、おなかをこわす場合もある。また、腐らせてゴミになる場合もあるし、腐らせて肥料になる場合もある。このように、消費では、消費したら得られるであろう効用ではなくて、実際にどのように消費されるか／されたかということ、さらに、消費することが生き活きと生きることに役立ったかどうかを問題にしなければならない。

第三は、計算量の限界である。財が二財の場合は問題にならないが、消費財の数が増えると計算量が膨大になり、人間の計算能力の限界を超えてしまう⁶⁾。

第四は、消費する毎に、毎回毎回効用極大はやっていない。現実の消費行動は、パターン化されていることが多い。むしろ、合理的になされていないところに問題があると言えるかもしれない。

第五は、消費するためには時間と情報のコストがかかるということである。全ての市場の情報を知り、全ての市場の均衡が成立してから消費を決定することは不可能である。昼食を食べるときに、洋服や電化製品の市場も考慮に入れることはしない。昼食のときはそれだけに限って消費を考える。完全情報を第一に仮定し、それから不完全情報を仮定するのは、方法論的に一見正しそうに見えるが、本当にそれでいいのだろうか。

このように、新古典派の消費理論はかなりの問題がある。現実には複雑であり、理論的に考察する場合には抽象化は避けられない。しかしながら、現実と全くかけはなれた抽象化を行っても問題解決の役には立たない。現実には生きている人間の行動から出発し、そこから個人的な要因を取り除いて、特定の時代の特定の社会に一般的に当てはまる抽象化を行うべきである。以下の議論では資本主義社会を念頭においている。文化的・制度的な枠組みが資本主義社会と大きく異なる社会を分析するときは、別の分析視点が必要になるであろう。

6) 詳しくは、塩沢由典、「市場の秩序学」、第 8 章参照。

III. 現実の消費行動

今日の社会に於いて、人々は消費する財・サービスの購入量の決定に於いて、新古典派の経済学が想定するように、予算制約下での効用極大は行っていない。現実の経済は、新古典派経済学が考えるように、完全情報が成立している訳ではない。それよりも重要なことは、人間はそれほど合理的には行動していないということである。

では、現実の人間はどのようにして意志決定をしているのであろうか。そこでまず考慮に入れなければならないのは、人間の欲求は高度化することである。そして、高次の満たすべき欲求については、不十分ながらも完全に満たそうと努力するが、低次の既に十分満たされた欲求については、それが簡単に満たされている限り、出来るだけパターン化して処理してしまうということである。

マズローによると、人間の欲求は、次の様な五段階に分けられる⁷⁾。

- ①生存の欲求
- ②安全の欲求
- ③愛と所属の欲求
- ④承認の欲求
- ⑤自己実現の欲求

社会の生産力の大きさとも関連して、社会の大多数の人々が、どの欲求水準で生きているかによって、経済は大きく変わってくる。

社会の大多数の人々が、①・②の欲求が十分満たされず、それらの欲求水準で生きている社会を「物的に貧しい社会」と呼ぼう。社会を構成する人々が最低限必要な食料さえも満足に手に入れることが出来ないという意味で、そう呼ぶことにする。このような社会では、とにかく食べていくこ

7) マズロー・A. H., 「改定新版 人間性の心理学」参照。

とが大変である。あまりにひどくなると人の心も荒廃してくる。1ドルの貨幣を得るために殺人を犯してしまう人もいる。また過去の戦争の多くは、この①生存の欲求が満たされなくて財を略奪するために生じたものである。「衣食足りて礼節を知る」というように、心が安定するためには、最低限の生活財は必要である。

この段階の社会では、出来るだけ多くの物を手に入れることが豊かさの基準になる。より多くの物はより多くの効用をもたらすし、物と交換できる貨幣は豊かさの象徴である。新古典派が想定している富概念と効用概念がよくあてはまると思われる。

また、「物的に貧しい社会」では、大量生産・大量消費が基本的な生産・消費のパターンになる。基礎的な消費が十分に満たされていないので、出来るだけ大量に、安く生産したほうがいいのである。消費者の方も出来るだけ安いものを消費しようとする。

現代の日本社会に於いては、この①生存の欲求、②安全の欲求はほぼ満たされ、③愛と所属の欲求、④承認の欲求が十分満たされていない。そこでは、①生存の欲求、②安全の欲求に関する消費の決定にあたって、最大化原理ではなくて、満足水準の設定と、パターン化が基本になる。

例として、昼食を食べる場合を考えよう。

おなかですいてくるから、或いは12時になったから、昼食を食べることを決める。多くの場合、12時になったから昼食を食べるのではないだろうか。ここにも、人間が、自己の本来的な欲求からではなく、社会的に？決められたパターンに従って消費行動をしていることがみてとれる。が、ここではそのことには深く立ち入らない。

昼食を食べることに決めたら、昼食のことだけ考える。洋服やテレビなど他の消費財のことは基本的に考えない。計算量の限界があるため、消費決定にとりあえず必要な財サービスだけを取り出して、それらだけを考える。

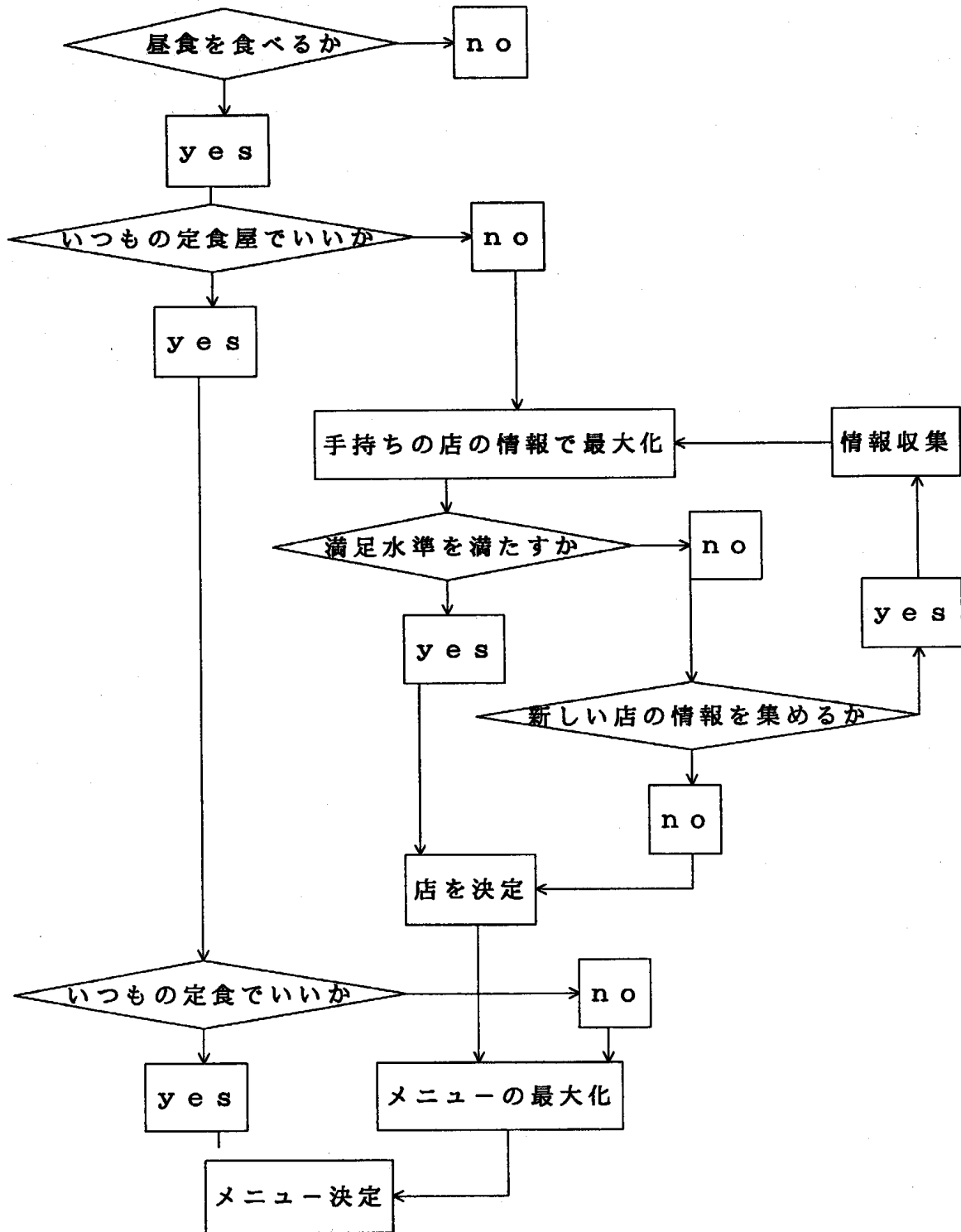
昼食を食べることに決めたら、次に食べに行く店を決める。いつもの定

食屋で満足であれば、そのように決めてしまう。定食屋が飽きたと思ったら、うどん屋、ラーメン屋、お好み焼屋、寿司屋等々を考える。手持ちの情報の中で、最大の効用をもたらす店を選ぶ。このとき、考慮しているのはあくまでも店である。もしくは、店の代表的なメニューである。決して、店の全てのメニューを考慮に入れているのではない。また、全ての店を考慮に入れている訳ではない。あくまでも手元に情報をもっている数軒の店の情報を考慮に入れて選ぶのである。

このとき効用の最大化を満たした店が、満足水準を満たしていればその店に決定する。もし満たしていなかったら、新しい店の情報を得るためのコストを予想する。その予想コストが低ければ、情報を収集し、情報が得られたら、新しい情報集合の中から効用を最大にする店を選ぶ。以下繰り返す。なかなかいい店がない場合は、情報収集コストが限界的に高くなっていくので、情報を収集したら得られるであろう限界効用よりも、限界的な情報収集コストの方が高くなるので、情報収集を止め、最新の情報集合の中から、効用を最大化する店を選ぶ。

店を決定したら、いつもの日替定食をみる。日替定食が満足水準を満たしたら、それに決定する。いやだと思ったら、全てのメニューの中から効用を最大にするメニューを選ぶ。

この決定の一連の流れを図示すると、次のようになろう。



このように、低次の消費行動は、パターン化と、満足水準の設定が基本になっている。満足水準を満たさないときは、限られた情報の中で、段階的に最大化を行いながら意志決定をしている。この昼食の例で言うと、ま

ず店を決定して、次にメニューを決定する。全ての店の全てのメニューをみて最大化を行っているのではないのである。

現代の日本社会に於いては、①生存の欲求、②安全の欲求はほぼ満たされているが、③愛と所属の欲求、④承認の欲求が十分に満たされていない。社会の大多数の人々が、③・④の欲求水準で生きている社会を「物的には豊かだが心貧しい社会」と呼ぼう。この社会では、生きて行く上での基本的な物的欲求は満たされている。満たすべきなのは、③愛と所属の欲求、④承認の欲求である。それらの欲求を満たすために、消費行動においては差異化を求める消費が中心となる。社会の動きと大きく異なった消費行動をすることは、③愛と所属の欲求を満たさなくなる恐れがある。かといって、周りと同じ商品を購入し消費したのでは、④承認の欲求を満たさなくなる恐れがある。自分自身は何処かの集団に安全に属してきたいのだが、その中で存在価値を認めてほしい訳である。そのために、ただ単に、周りの人々に見せびらかすためだけに、商品を購入することもある。また、自己本来の欲求が分らないので、資本の煽る流行に踊らされて、神経症的な消費を行うこともある。また、自分自身が心の底からやりたいことをやっていないため、ストレスがたまり、ストレス発散の為の商品購入になっている場合もある。

この時期になると、大量生産・大量消費という生産・消費のパターンはくずれてくる。基礎的な消費が満たされていると、そのことに対して消費者はあまり関心を示さなくなってくる。単純に消費量が増えれば効用が増えるとは言えないのである。消費者が差異化を求めて消費してくるので、生産の方も多品種少量生産にならざるをえない。

販売にあたっては、広告が重要な位置を占めるようになる。差異化を強調し、その商品を購入することが、③愛と所属の欲求、④承認の欲求を満たすものであるかのごとく暗示的なイメージ広告を多用するようになる。また、少しの刺激では消費者の購買欲を刺激することが出来ないので、誇大広告が増えてくる。少しの差異を、さも重要な差異であるかのごとく見

せかけて購入させようとするわけである。もともと商品に重大な差異はないから、商品を購入したとしても欲求が満たされることはない。そして、次に購入させるためには、さらに大きな刺激が必要になる。

人間は、最終的には、自己実現の方向に向かうべきものである。しかしながら、自分の方向性が見えている人は少ない。自分の方向性が見えないまま、差異化を求めると、企業のイメージ広告にふりまわされ、のせられてしまう。単なる差異化を求めての消費では、③愛と所属の欲求、④承認の欲求が満たされるはずはない。心の底から満足をおぼえることもなく、ただ消費を続けていくことになる。

まとめてみると、今日の日本社会に於ける人々の消費行動においては、①生存の欲求、②安全の欲求に関しては、満足水準を設定したパターン化された消費行動をしている。そして、③愛と所属の欲求、④承認の欲求に関する消費では、その欲求を満たすべく努力するが、なかなか十分に満たされることはない。その原因は、本来の自己の欲求が分からないために、企業の広告にのせられた消費行動をしていることにある。本来の自己の欲求に従い、③愛と所属の欲求、④承認の欲求を満たし、⑤自己実現の欲求で生きていく消費について、次節で詳しく考察してみよう。

IV. プロセスを進める消費行動

以上述べてきたように、低次の欲求を満たすための消費行動はパターン化され、高次の欲求を満たすための消費は、多くの場合十分に満たされていない。③愛と所属の欲求や④承認の欲求が十分に満たされないから、心の底から満足感を感じることがなく、自己実現を図ることができない。それらの欲求を満たし、自己実現を図ることができる消費行動（これをプロセスを進める消費行動と呼ぶ）について以下詳しく考察しよう。

人の消費を考えるときに、効用に止まっていたはいけない。効用は人が生き活きと生きることは関係ない。単なる個人の好みの問題である。極

端な話、アルコール中毒の患者がお酒を飲んでも、予算制約の下で効用極大をしていると考え、新古典派の消費理論では問題にしない。しかし、本当にそれでいいのだろうか。それで社会の問題を解決することが出来るのだろうか。

今まで何気なく消費という言葉を用いてきたが、そもそも消費とはどういう意味であろうか。「消費」を手元の国語辞典で引いてみると、「使った結果、そのもの（の余分）を無くすこと」とある。英語では消費するは、consume であるが、これを手元の英和辞典で引いてみると、「ラテン語 consumere より (con-完全に+sumere とる=完全にとる)」とある。つまり、「消費」とは、本来完全に使いきるという意味なのである。

この完全に使いきるということの意味は、次の様に考える。つまり、財がもつ固有価値を十分に享受し、活用することと、潜在能力を顕在化させることである。このことを十分考慮したときに、初めて資源は最適に配分されるし、人々も生き活きと生きることができる。

この本来の意味での「消費」は、人の身体でいえば、「消化」に例えることができる。十分な食事をとることにより、心は満たされ、満足される。食べた物は、胃や腸で消化され、血肉となる。完全に栄養になった後で、残りが排泄される。排泄物は土に帰り、土の栄養となり、また食べ物を作る。全てのものが過不足なく利用され、循環し、地球を汚染することもない。きちんと消化されることにより、心が磨かれ、欲求が満たされ、余分なものは必要がなくなる。しかし、食べ過ぎると消化不良をおこし、ストレスとなり、病気になる。

「消費」も「消化」と同様に、購入量が十分に活用できる許容量を超えてしまうと、それは十分に活用されず、ゴミとなって地球を汚染することになる。個人個人で生じていることが、社会でも生じているのである。

消費ということばが本来こういう意味をもつのであれば、安易に消費という言葉を用いない方がいい。購入・使用・活用・使いきりと区別して用いた方が、本来の消費を行うためにはいい。こう考えると、新古典派の経

経済学は消費といっても購入しか問題にしていない。市場で商品の需給が一致して売れて行くことにしか関心がないのだから。

財のもつ固有価値を活用し、使いきることから考察しよう。食べ物を例にとれば、まずはじめに、食べてしまうことである。食べずに腐らせてゴミとして捨ててしまうことは消費するとは言わない。このことは自明である。このことに関しては、冷蔵庫が大きく関わっている。冷蔵庫があるがために、必要以上に多く買込み、そして冷蔵庫の中で腐らせるという問題が生じている。

次に、ただ食べてしまえばいいかと言うと、そうではない。その食品が持つ栄養素を十分に栄養にしなければならない。今日の病気は栄養不足と言うよりも栄養過多でなっていることも多い。身体に必要なものを過不足なく食べることが重要になる。さらに、食品が持つ栄養素を損わないような調理の仕方、食品を組み合わせることによって、栄養のバランスをうまくとることも出来る。例えば、大豆だけを多量に食べると甲状腺の異常をきたすことがあるが、昆布などの海草とともに摂取すると、そのような異常はきたさない。この、食べ物をきちんと栄養にするということに関しては、ほとんどの家庭に普及している電子レンジの使い方が問題になる。手軽に暖めて食べられるのは便利でいいが、意識しないと冷凍食品に偏り、栄養が偏る恐れがある。

最後に、食べ物の消費の上でさらに考えなければならないのが、コミュニケーションの手段としての固有価値である。家庭で家族全員が揃わず夕食を取ることが多くなっている。中には、母親は他の部屋にいて、子供が一人で食事をしている例もある。食事を一緒にすることによって、十分なコミュニケーションを図ることが大切になる。このことによって、③愛と所属の欲求、④承認の欲求を満たすことを工夫することが重要になる。食べ物を消費する上で、最低限これだけを考えないと、本来の意味で消費したということとは出来ない。

このように、財が持つ固有価値を十分に活用し、使いきることで、消費

をするうえでの第一のポイントになる。そして、その固有価値を引出せるかどうかは、人の享受能力にかかっている。パソコンを買ったとしても、使い方が良く分らずに押入にしまいこんでしまう人もいれば、ワープロ、表計算と様々に最大限に使いこなしている人もいる。

高い享受能力を持った人が、財の固有価値を十二分に引出して財を活用し、使いきったときに、その財は有効価値を持つという。

消費するうえで次に考えなくてはならないのは、消費することによって、その人の生きる力が生き活きと輝きだしてくるかどうかである。財を活用することも大切であるが、それと同等かそれ以上に、財を使用することによって、生き活きと生きているかどうかが重要である。逆に、財・サービスを使用することによって、生き活きと生き出す瞬間瞬間に、本来の意味で消費したということが出来るかもしれない。

食べ物を例に取れば、食べ物がもつ栄養素と、それを摂取する人の、身体の状態がマッチして、食べることにより、スーパーヘルスになったり、病気が治ったりすることである。また、心の底から楽しめる食事を仲間としたときに、生きるエネルギーが湧いてくるのを感じることが出来る。

このことと関連して重要になるのが、欲求水準の高度化と、潜在能力の顕在化である。

日本社会に於いては、多くの人が、マズローのいう①生存の欲求と、②安全の欲求は満たされている。しかし、③愛と所属の欲求或いは、④承認の欲求は満たされていない。これらの欲求が満たされないと、⑤自己実現の欲求にしたがって生きることが出来ない。

財の持つ固有価値を活用するよう消費を行うためには、最低限、無駄な購入をなくすことが必要である。買っても食べずに腐らせてしまう食べ物、一度そでを通しただけで、着ることもない洋服、使いこなせず押入れにしまい込んでしまったパソコン等、家の中を見回したり、家庭から出るゴミをちょっと注意しチェックするだけでも、不必要な購入をしていることが分る。これは、自分の本当の欲求が分らなくなっているからである。言い

換えれば、一時的なストレスの発散のための購入の仕方であり、満たされない欲求、イライラを紛らす行為である。まずこうした欲求不満状態に気付き、正面からそれに対処する必要がある。

自分にとって、本当に必要なものが分ると、無駄な買物はしなくなる。ワープロにしか利用しないのに、わざわざパソコンを買うような、無駄な買物はしなくてすむ。自分が本当に必要なものが分るから、必要にして十分なものを購入することができる。財の固有価値を十二分に活用することになるのである。

財の固有価値を十二分に活用することは、潜在能力の顕在化につながる。パソコンを例にあげれば、WINDOWS の使用により DOS とは較べものにならないくらい綺麗で見栄えのする文書が簡単にできるようになったが、そのような文書をつくるだけの能力が顕在化していなければ、WINDOWS パソコンを十二分に活用することは出来ないのである。人間は、様々な潜在能力をもって生まれてくるが、その能力を十二分に発揮して生きている人は稀である。この潜在能力を顕在化することが、消費行動に於いても重要になる。

V. プロセスが進む消費をしているかどうかの判断

財の消費について、ただ単に効用の極大だけを考えていてはいけない。財のもつ固有価値を活用し、使いきっているか、人の持つ潜在能力が顕在化するような消費をしているかどうか、財の消費について重要であることを述べてきた。ここではそれらのことを判定することを考える。

まず、財の持つ固有価値を活用し、使いきっているかどうかの判定から考えてみよう。第一に、ゴミの量で判定することが考えられる。財が最も活用されないとき、それはゴミとして捨てられることになる。食べ物を購入したのに、食べずに腐らせてしまえば、それはゴミとなる。

第二に、使用頻度で判定することが出来る。購入し、一度しか着ずに押

入にしまっただけの服は、活用されているとはいえない。使わなくなった電化製品、もらいものをして、一度も使用せずに押し入れにしまい込むのもそうであろう。いつか利用するだろう、いつか役に立つだろうと思って取っただけでも、使用しないことが多いし、いざ使用するときになって、何処にしまいこんでいるか分からず、結局使用しないこともある。

第三に、使用頻度と関連があるが、一つの財が頻繁に使用され、活用されることによって、物的な財の消費量が少なくなってくる。手持ちの物を活用する能力が高まることになり、少しの物で十分に豊かな生活を送ることが出来るようになる。

第四に、財の持つ、最大限の性能を引出して活用しているかで判定することが出来る。例えば、32,000色表示可能なパソコンで、256色しか表示させずに使用しているとしたら、単純に計算して、0.8%の能力しか利用していないことになる。

第五に、財の持つ様々な能力の中で、どれくらい活用しているかで判定することが出来る。例えば、パソコンは、ワープロ、表計算、データベースと様々な活用することが出来るが、ワープロにしか利用していないとすれば、十分に活用しているとは言い難い。

第一と、第二の判定基準については、判定は容易である。利用されていないことに関しては、同じだからである。利用されなくて捨てられると、ゴミと呼ばれるが、利用されなければ、捨てられなくても、ゴミを所有しているとみなすことができる。もちろん、ゴミの量が多いほど評価は低くなる。

問題は、第四と第五の判定基準である。32,000色表示可能なパソコンを、グラフィックのみに最大限に活用している人(図2)と、ワープロその他に、それなりに活用している人(図3)を比較したときに、どちらをより活用していると判定するか。これは難しい問題である。

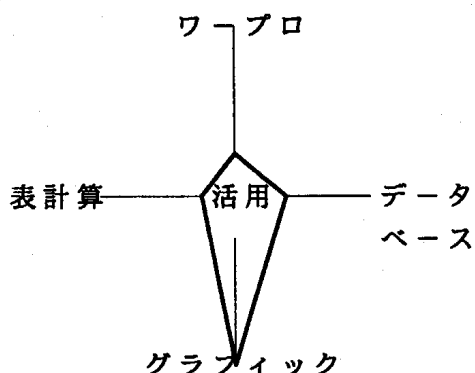


図 2

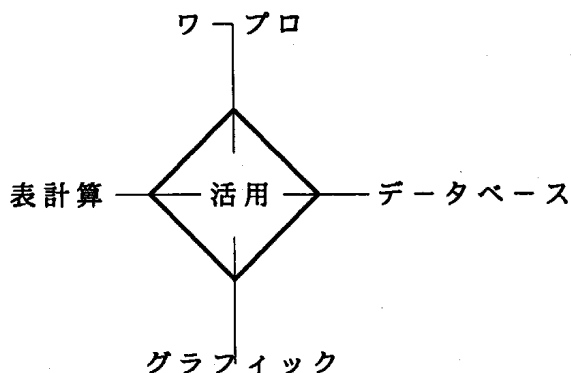


図 3

このとき考えなくてはならないのが、潜在能力の現実化ということである。つまり、潜在的に持っている能力を日常生活の場で具体的に発揮しているかどうかである。

潜在能力の顕在化といってもその判定は難しい。観察できることから推定することになる。まず第一に考えられることは、欲求水準の高度化である。日本人の多くは、③愛と所属の欲求か、④承認の欲求が満たされなくて、⑤自己実現の欲求段階まで進んでいない。従って、財の使用をみると、それらの欲求が満たされるような財の使用をしているかどうかをみるのである。例えば、③愛と所属の欲求段階にいる人の場合、食べ物を、ただ単に栄養をとるだけに食べていたら、ダメである。つまり、ぽつんとただ一人で寂しく食事をしていたらいけない。家族や友人と一緒に、コミュニケーションを図りながら、お互いの理解が進むような食事を続けていると、そのうちに、③愛と所属の欲求は満たされ、次の④承認の欲求の段階に進むことができる。

⑤自己実現の欲求にはいると、食事は、TPOに合わせて様々なかたちをとる。ラーメン一杯で済ますこともあれば、豪華に時間を取ってゆっくり食事をすることもある。大切なことは、自分が本当に心の底からやりたいと思うことをやり遂げることであり、それ以外の事は、簡単に済ませるようになる。食事に限って言えば、量的に必要十分であり、食べ残しが出な

いこと、栄養のバランスがとれて、健康を害しないことが、判定のポイントとなる。さらにプロセスが進んでくると、肉類を必要とせず食べたくなくなる。菜食中心の食生活になる。単なる偏食とは違い、身体が肉類を欲しなくなる。それでいて身体は疲れない。また、酒、タバコといった嗜好品もあまり欲しくなくなってくる。

パソコンを例に取れば、皆が持っているから、ただなんとなく、購入する場合は、③愛と所属の欲求か、④承認の欲求により購入している場合である。この場合は、自分が使用する真の目的が分っていないので、パソコンがもつ様々な機能を、平均的に高く使いこなしているほど評価は高くなる。

⑤自己実現の欲求により購入している場合は、使用目的がはっきりしているため、その為に必要な機能を十分に使いこなし、自己の持つ潜在能力を現実化しているかどうか、判定のポイントになる。例えば、グラフィックの為にパソコンを購入したのであれば、その機能を十二分に活用しているかどうかはかみない。ワープロの機能を活用しているかどうかは、判定の材料にはならないのである。32,000色表示出来るパソコンで、32,000色の機能を十分活用しているかどうかである。自己の持つ能力にパソコンが追いつかなければ、もっと高機能のグラフィック能力をもったパソコン例えば1,677万色表示可能なパソコンを購入するしかない。

また、欲求段階が高度化し自己実現の欲求に入ると、消費する財が変化してくることがある。例えば、自己実現の欲求段階になると、それまでの暗い消極的な性格が、一転して明るく積極的な性格に変わることがある。それにつれて、例えば選ぶ服が、暗い色の服から明るい色の服に変わる。

以上が、欲求段階から見た潜在能力の現実化であるが、このほかに、心身の状態から見る方法がある。人は誰でも、心の底からやりたいと思っていることを、日常生活の中で実践しているとき、心身の状態はいいものである。これは何故かと言えば、人間の身体には、気が流れているからである。気が十分に流れていると、血液の流れもよくなり、病気にかかり難く

なる。従って、心身の状態が良く、身体のだるさ、肩こり、腰痛等々がないこと、病気にかかっていないかどうか、潜在能力の現実化の一つのチェックポイントになる。

病気になった場合、それが日常生活の歪みからくるものであれば、食べ物、呼吸、身体の歪み、心の持ち方を正すことにより、気の流れがよくなれば、自然治癒力の働きで、自然に治っていくものである。

すぐれた気功師になると、気の状態を読むことが出来る。今日、気を測定することも研究されはじめているので、近い将来、気の量と質を何等かの測定器具を用いて、客観的に測ることが出来るようになるかもしれない。

以上、消費の判定について述べてきたが、潜在能力が現実化する消費を行っているかどうかの判定ポイントは、次のようにまとめられる。

- (1) ゴミがないこと。
- (2) 全ての物を活用し、使いきっていること。
- (3) 消費する物的な量が少なくなる。
- (4) 消費する財が変化してくる。
- (5) 本人が心身共に健康で生き生きしていること。

VI. プロセスを進める消費のために—結びに代えて

本稿では、新しい消費の在り方として、プロセスを進める消費について考察してきた。消費の在り方を正すことによって、今日の社会が抱えている多くの問題を解決することが出来る。ゴミが出ないような消費活動をすれば、ゴミ問題は解決されるであろうし、食事を正すことによって、多くの病気が治っていく。病気をしないような、してもすぐ治っていくような消費の在り方は、未曾有の高齢化社会を前にして、もっともっと追及され、実践されていってもいい問題である。税制や年金の制度を変えていくことも重要であるが、生き生きと老いるような生き方を追及していく方が、高齢化社会の根本的な解決につながるのではないだろうか。

消費とは、本来ただ単に購入し、使用することではない。財・サービスのもつ固有価値を活用し、使いきり、そのことによって、潜在能力を現実のものとし、生き活きと生きることである。従って、消費という言葉をやや安易に用いずに、購入・使用・活用・使いきりと区別して使ってみることである。

消費行動に於いてプロセスを進める為にまず大切なことは、ゴミをなくすことである。完全になくすことは難しいから、まずは最小限のゴミに抑えることが重要である。その為には、無駄な購入をしないことが大切である。何かを購入するよりも、手元に所有しているものを、徹底的に活用することを考える。考えることは、潜在能力の現実化にもつながる。そして、一年以上使用していないものは、喪服等を除いて、迷わず処分することである。いつか使うだろうと思っても、使用しないことが多いし、なくても暮らしていくことは出来る。

次に重要なことは、⑤自己実現の欲求で生きることである。その為にはまず、③愛と所属の欲求と④承認の欲求が満たされる必要がある。その為には、家族の在り方と、コミュニケーションの能力を高めることが大切である。これらのことについては、別の機会に詳しく論じたい。

③愛と所属の欲求と④承認の欲求が満たされたとして、⑤自己実現の欲求で生きるためには、自分の感受性と感覚を高め、欲求を行動に移すことが大切である。思うだけで、考えるだけで、何も行動に移さないということでは、自分の心の底からの欲求が分らない。自分の心に正直に行動することにより、自分の真の欲求がだんだんと見えてくる。真の欲求を知るためには、例えば、バイディジタルオーリングテスト等の、潜在意識を身体の反応として取り出す技法の活用も考えられる⁸⁾。

自分の本当の欲求が見えてきたら、その欲求を十二分に活かすものを購入し、それを120%活用していけばいい。物を活用し使いきることによって、

8) 例えば、大村恵昭、「バイディジタルオーリングテストの実習」参照。

自己の持つ潜在能力が、さらに現実のものになってくる。自己の能力が高まり、使用しているものでは自己の持つ能力を十二分に発揮できなくなれば、そのときにそれは処分して、自己の持つ能力を120%発揮できるようなものを新たに購入するのである。

以上述べたことを日常の消費行動において意識することにより、より豊かな消費生活を送っていくことが出来るようになると思われる。

参考文献

- [1] アルハデフ・D. A., 「消費者行動と経済心理学」, 志津野知文, 長田佳久訳, 東洋経済新報社, 1987年。
- [2] カーパー・J., 「食べるクスリ」, 丸元淑生訳, 飛鳥新社, 1991年。
- [3] ダグラス・M., 「儀礼としての消費—財と消費の経済人類学」, 左和隆光, 浅田彰訳, 新曜社, 1984年。
- [4] 古田隆彦, 「「象徴」としての商品—記号消費を超えて—」, TBSブリタニカ, 1986年。
- [5] 池上惇, 「経済学—理論・歴史・政策」, 青木書店, 1991年。
- [6] 経済企画庁国民生活局, 「国民生活を変える新たな主役たち」, 大蔵省印刷局, 1991年。
- [7] ランカスター・K. J., 「消費者需要—新しいアプローチ—」, 桑原秀史訳, 千倉書房, 1989年。
- [8] マズロー・A. H., 「改定新版 人間性の心理学」, 小口忠彦訳, 産業能率大学出版部, 1987年。
- [9] 日本消費経済学会, 「消費経済学総論—生活科学のニュー・フロンティア—」, 税務経理協会, 1993年。
- [10] 大村恵昭, 「図説バイ・デジタル O—リングテストの実習」, 医道の日本社, 1986年。
- [11] ラスキーン・J., 「この後の者にも」, 西本正美訳, 岩波書店, 1928年
- [12] 桜沢如一, 「食養人生読本」, 日本CI協会, 1938年。
- [13] セン・A., 「福祉の経済学—財と潜在能力」, 鈴木興太郎訳, 岩波書店, 1988年。
- [14] 塩沢由典, 「市場の秩序学 反均衡から複雑系へ」, 筑摩書房, 1990年。
- [15] スミス・A., 「諸国民の富 (一) ~ (五)」, 大内兵衛, 松川七郎訳, 岩波書店, 1959年~1966年。
- [16] 馬田哲次, 「経済学と心理学の統合を目指して—潜在能力からの接近—」, 山口経済学雑誌 第40巻第5・6号, 1992年。
- [17] ワルラス・L., 「純粹経済学要論」, 久武雅夫訳, 岩波書店, 1983年。